



現
英名百首

沼尻絰一郎編輯

全



真亭逢多編輯

鮮高永濯画



現 英名百首 全

明治十四 同盟會

九月出版 普及



序
 七
 八
 九
 十
 十一
 十二
 十三
 十四
 十五
 十六
 十七
 十八
 十九
 二十
 二十
 二十一
 二十二
 二十三
 二十四
 二十五
 二十六
 二十七
 二十八
 二十九
 三十
 三十一
 三十二
 三十三
 三十四
 三十五
 三十六
 三十七
 三十八
 三十九
 四十
 四十一
 四十二
 四十三
 四十四
 四十五
 四十六
 四十七
 四十八
 四十九
 五十
 五十一
 五十二
 五十三
 五十四
 五十五
 五十六
 五十七
 五十八
 五十九
 六十
 六十一
 六十二
 六十三
 六十四
 六十五
 六十六
 六十七
 六十八
 六十九
 七十
 七十一
 七十二
 七十三
 七十四
 七十五
 七十六
 七十七
 七十八
 七十九
 八十
 八十一
 八十二
 八十三
 八十四
 八十五
 八十六
 八十七
 八十八
 八十九
 九十
 九十一
 九十二
 九十三
 九十四
 九十五
 九十六
 九十七
 九十八
 九十九
 百

英名百首

附圖

一



口をきみはめるは武士の鑑の我こそは秋の夜更
 のきむきききききききききききききききききき
 に或しそとみ歩能りのを操まきききききききき
 そは人びとの面影あむ宮——出々歌りりりりり
 若身のたらしむ及ひ去まきききききききききき
 みげたれをきききききききききききききききき
 人の功勳を志きききききききききききききき
 昇初のとををのきききききききききききききき
 愛をとらききききききききききききききききき
 花出あるやまの下の下ききききききききききき
 あらそあおあまきききききききききききききき

明治十二乙卯四月穀旦

後男法



實美公ハ三條實萬卿の御子小
 然小安政六年の秋幕府の
 命あり縉紳家々嫌疑の事ま
 りとて實萬卿を髪を削
 たり幽閉せしめり公之
 を歎き哀しみ文久三年少
 りて天朝幕府の御間柄不頗
 る議論を醸しける公ハ六卿と
 俱小西國小下り給ひ其後慶
 應元年幕府征長の兵を還
 ナ公ハ再び京師小趣き明治元
 年の冬鳳輦と守護しと東
 小下向倭幕府の覇業を顛
 覆し太政復古の功を立て後從
 一位大政大臣登庸ありたり

三條實美公

年形み



秋の夜更
 福田の
 秋の夜更

具視公ハ博識秀才トシテ
 豪邁沈勇ノ聞ヘ高く眼光
 炬ノ如ク拜セシ小非常ノ入
 志ヲ知レリ維新ノ後右大
 臣小任一平素公暇を得
 時ハ和漢洋書ヲ研究セ
 レ明治五年全權大使トシ
 ツテ欧米各國ヲ巡回シ
 婦朝小ソリ征韓論ヲ解
 破リ皇國ヲ補翼倣キ一其
 後從一位叙任シケリ



岩倉具視公
 小倉中は
 えねの
 横を
 以てあふれ
 是よりいふ
 喜地何れ

孝允君旧長藩ヨシテ本姓
 と和田ト云ふ後ハ桂小五郎ト
 改メ吉田松陰ノ門ヨリ其後
 江戸小出て幕吏江川勝ノ兩氏
 小就テ西洋ノ事情ヲ搜リ其
 後長州小降り元治元年ノ秋
 長藩三家老ヲ始メ京師鈴御
 門ノ戦争ノとき本戸準一郎ト
 変名シて丹波路ヲ潛ミ維新
 ノ後大政復古ノ功臣トあつて
 参議小任セられ一度職ヲ辞
 シ明治八年從三位内閣顧問
 トシテ命ジテ同十年正月
 二十六日西京ニ於テ卒ス



木戸孝允
 やまの山
 松のころ
 みどり
 代乃
 喜やみさら舞

柳原光愛卿の御女は
て幼少より歌書と好み
志操雄々しくして大内
ふ仕ひ権典待小叙し平
素皇暇を得る時の野史
小説のいふとまじりなり諸
子百家の書を刑究て
れ召使ふ者ありまじり
け人の過を根小問す
人の善哉聞て悦び悪き
をさして歎しと云



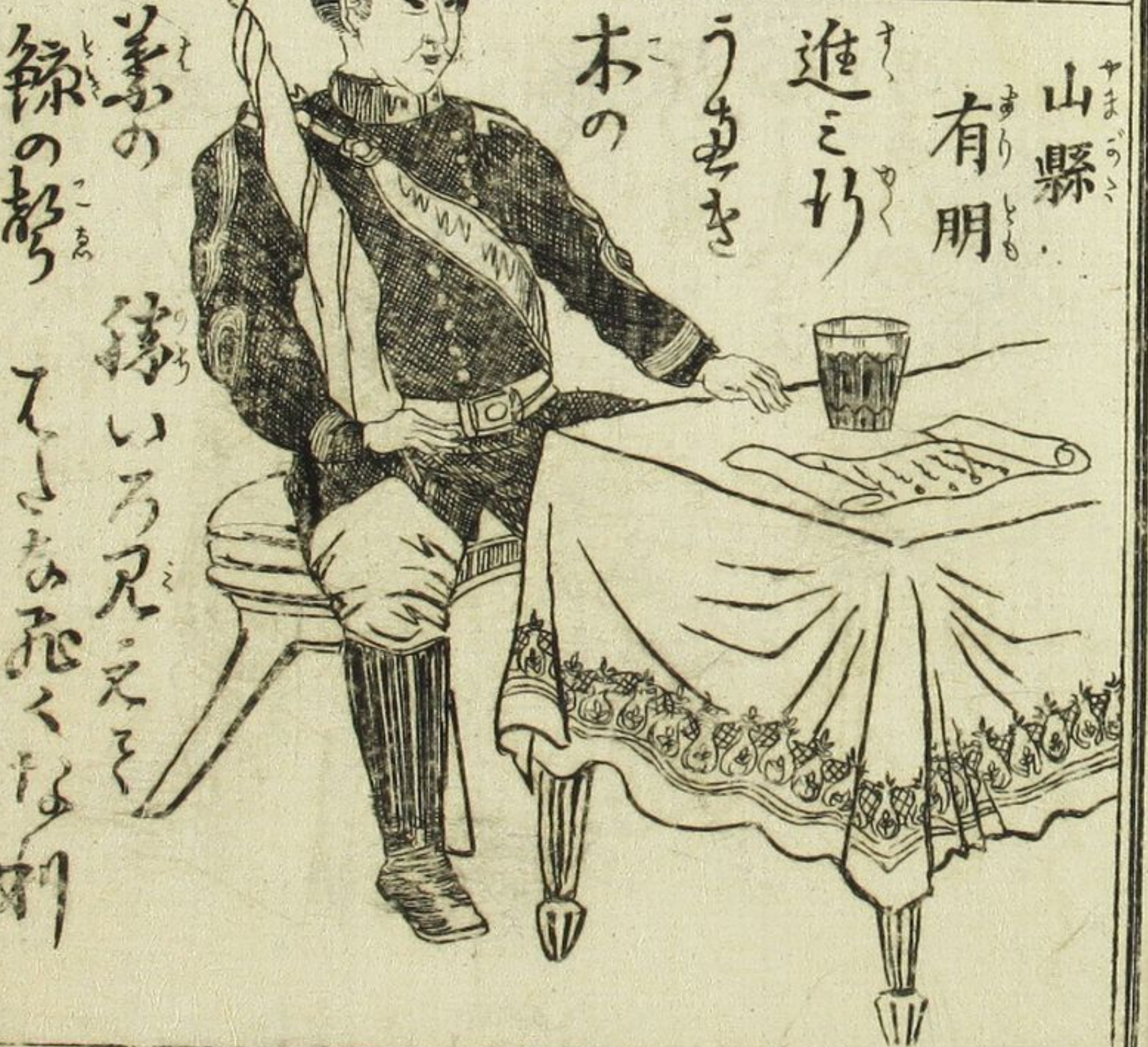
退助君へ旧土州藩士として
山内容堂侯愛臣より剛
豪才智の英傑を以て戊辰の
役より伏見の開戦より興羽
子趣き参謀となり會津若
松城に向へ搦手より攻入り終に
降伏せしめ明治二年王政復古
の功臣とあつて従四位の参議任
じ同六年征韓論の時小辞職
して高知縣より立志社の
長に成りしと云ふ



利通君薩藩士として通稱を
市藏と呼び甲東と号し大資
英雄多し和漢洋書を渉り慶
應二年京師より岩倉公
に據り王政復古の大業を論
議して明治二年参議に任
せられ維新の功臣とつて
賞典録千八百石を賜はる三
位に叙任し同七年既江
藤長の叛逆を鎮み又臺灣
征討の事起り辨理大臣
となり清国と和議し
同十一年五月十四日東京赤
坂紀尾井坂に於て兇徒
の爲に四十三を期して薨す



有朋君八倉長州の藩士として
維新の際に藩主秋彦と謀り
朝廷に忠を盡し就中戊辰の
役不奥羽出張して屢戦功あ
り明治二年陸軍少将となり
幾程もなく正位中将兼陸
軍卿に叙せられ西南征
討の参軍を命せられ
有柄川總督の宮と俱に肺肝
を碎き奇計を以て賊軍を日向
に追討し遂に平定ありぬる



後藤氏ハ舊主州容堂侯の
 愛臣トシテ正義絶倫此
 英傑あり慶應二年容堂
 侯の命を受け幕府へ書を
 呈し大政復古ヲ命じし
 戊辰の役ハ開戦より戦
 功屢多れば維新の功臣ト
 あつて参議ト任じ幾程も
 く辞職し経済学を専
 りとなし其後逢萊社の
 長となりと云ふ



喬任君ハ鍋島閉叟侯乃
 愛臣トシテ博識多才
 たり文久三年京師ヨ
 ちつて國事ヲ尽力し
 維新の際功ありて司法
 大輔ト任じ幾程もま
 正四位司法卿兼参議ト
 叙せられ山口前原黨の
 暴挙より西南事件ヨリ
 遠屢々肺肝茂くだいて
 勉勵ありと云ふ



純義君ハ旧薩藩にて智勇兼備の豪傑あり戊辰の役ハ奥羽ヲ出張して屢軍功あり平定の後海軍ヲ輔任ト明治六年從四位中將ヲ登庸西上南の事件ヲハ肥後並海軍ヲつて疾くも艦隊ヲ整備し薩長茂固めて賊艦ヲ奪ひ捕り官威ヲ熾マシテ奉軍ヲなり甕島ヲ攻入り遂に平定スミメナリ



河村純義

立廻りも
様どほ
花丸に回ひも
危ちありなり

道貫君ハ鹿児島縣の士族トシテ頗る剛勇の聞へり西南の事件ハ肥後路に出張し高橋の戦ひ少佐の聯隊旗を賊軍に奪れしと聞より道貫君ハ駿馬に鞭をか、馳せ入透敵を馬蹄を蹴散らし難は旗を取返味方の陣へ引返されと云



野津道貫

武勇の有
まはり
しほ
重き務
これ中
始
ゆ
ひ
は

福澤ハ豊後國中津の人は
 て幼少より蘭学に通じ
 開港の後洋書哉さうんじ
 研究し和漢の学は渉り頗
 る博識多才より維新の
 後東京三田まで慶應義
 塾校設け多くの生徒を
 集め日夜教導なり仁
 智を閑々しむるハ實に外
 國小聞へ皇國の誉れな
 りとそ



晴湖ハ下總國古河藩の
 宰奥原何某の女より
 幼少より書画をこの
 み且詩文は通じ別号
 を東海と呼び頗る秀才
 たり常に高位佳人を
 友とし文人画哉りつて
 江湖は知られ英名名義其
 らせハ實に婦人佳
 名譽と
 知るこいと哉



奮の家名を遠州屋と呼び
 東京三十軒堀に住居し煉
 既の志氣ふかく奮幕府
 の頃盛岡藩に就て国事
 力一終獄舎の中長繫
 礼流刑となりし維新の際
 放免となり横濱にいり
 建築の請負を業となし
 又瓦斯燈を發業して豪
 高の一人たり皇國の誉と
 りて政府より金盃賜られ



今紫ハ東京高輪の産れ
 一て父も高橋何某とい本名
 幸女と呼び三代目の今紫より家
 長金瓶樓松本金兵衛の抱
 娼妓より先年舊幕府時代
 の頃諸色高直して市中難渋
 由茂聞いて金百円餘と施其後
 ある書生が客となり学費を過
 つて依頼をのみ今紫金五十円
 を差出して之を勉勵し給
 ひと恵みたりとぞ



英名百首

西村下總國佐倉の人にして
 憂國の志氣深く豪邁なり
 維新以來東京より東名
 と伊勢屋と呼び海陸省の御用
 と手請負して納品に倭製炭
 以て舶来の右に出る事を發
 明す既に富國強兵の基とい
 うんと専ら尺方一まゝ
 千葉縣下の海産と熾ん
 せし勉勵の實に内國の豪
 高といふなり

西村勝藏
 倭の自然
 伊勢の
 山の
 社と
 拜之のてらふ



柳圃八通稱を重次郎と呼
 ひ壮年より詩文に涉り花
 鳥山水の画に能く頗る
 大家あり此人性質簡約
 長者の風あり又國
 史も通し弱冠の頃より
 詩集を著さん事よ心哉
 芳一遂に著る所の詩文
 數十巻あり風雅を好む
 人画仙と呼び専ら洛の大
 雅堂の風あり

福島柳圃
 名家の
 びる
 あり
 あり
 あり
 あり
 あり



尚中先生、総國佐倉藩
 醫師なり、身は憂事、
 暇を乞ひ、器能を深く
 許し、
 後維新の際、朝廷より軍
 醫監に命ぜり、東京
 に出、良醫の誉れ高け
 る人皆つとて診察を
 乞ふ、先生は再び七を取
 るま、と誓ひ、故嫡子進
 めて療治せしといふ



順先生、頗る外科の名
 醫なり、て戊辰の役、
 奥羽征討の官軍に隨行
 し、函館まで出張す、平
 定の後、其功に賞、
 可し、陸軍醫監となり
 先生、常に書を能く
 し、療治は妙あり、良
 醫なり、と云ふ、幾程も
 なく、總監とあつて、正
 位に叙任し、



矢名百首

福地ハ長崎のひと通
辨を兼蘭洋の学ヲ涉リ
維新の後官途ヲ進ミ幾
程ナク其職を辞して新聞
の社ヲ設け局長となつて論
説或ハ雜報小説等あり
あつさるる各國の新報
至るまで是ハ新聞紙
記載ハ江湖ニ示シ開化
進歩の魁たりハ此福地
氏ありしと云



福地源一郎

岸田ハ博く和漢の書
通シ經漢学ヲ専らシ
して高法も達して蘭
洋の學と云々學び新聞
の社を設け多くの論説
雜報を掲載し局長とな
り又賣藥の發明ハ心を
勞シ精奇水と名づけし
目薬ヲ營業る一内國
いつと云々なり外國迄
も英名を興かせしと云



岸田吟香

枕山ハ方今名高き詩人にて
壯年の頃諸國を遊歴し
兼て諸子百家の書ハいふも
さへたり野史小説も渉
るなりつゝ著す所の諸文
章數百卷あり書をもつて
江湖は示す且多く詩集は
中華人も見聞して枕山を
皇國の詩仙たりといふ

題隅田川風景

東路迢迢隅水滄。懷京問
土意沉沉。誰知閑雅唯皮
相。中有幽情寄渚禽

大沼枕山
讀ゆる



のほは社
倭歌とも
云ふか
りる

成島ハ舊幕府の奥儒
者にして和漢の書ハいふも
きうまり詩文和歌も
通し維新の後宮途
就らず此人秀才ふれ
別て著す所の書數百卷
あり又雪月花と友として
ト居を閑静にふり然るも
増新聞雜誌の熾きもつて倫
説と朝野新聞を掲載し
又編輯の長とふりしとぞ

成島柳北
と家老の
言のま
らふ



中子
墳地
砂子の
数
考せ

正齋八通稱と貞亮と呼び
 詩文と能く書かば頗る
 能書きて壯年の頃蔵遊
 歴る一老叟及び私熟
 茂東京龜澤町に設ち
 書法を専らし多く
 書法を紀し法帖を
 著しを江湖に傳へ
 能書と以てしり
 時ハ皇國第一等の書仙
 ありといふ



柳田正齋

かき
 つつめ
 草の
 林に
 ふかく
 遊む

支峯ハ山陽の長男ありし
 三樹の兄あり頗る博識小
 て國史に通たりし先
 年國事ハ尽力し第三樹
 の幕府より疑ひを受て縛
 せられし時悉く辨解な
 せとも用ひられず却て嫌
 疑伐受し故洛外ト居
 一姑くあつて洛中に出維新
 の後東京よりしり幾程も
 なく西京にかりけり



頼支峯

又
 乃
 ら
 れ
 つ
 る
 通
 り
 の
 名
 氏
 と
 混
 ん
 じ
 る

博文君ハ舊長洲の藩士
 して通稱を俊助と呼び博
 く和漢の書は通じ兼て蘭
 洋学をさく学ひて詩文和歌
 は達し木戸氏と供し京師
 はあつく國事は尽力し大政
 復古の大業は成し其功は
 よく参議工部卿を兼任
 一文明治十一年五月正四
 位内務卿に轉叙せりま
 けり



紅蘭ハ星巖の妻
 して博く和漢の書に
 通じ頗る烈女たりまた
 書画和歌も達し夫
 死してのち洛ふりり懐
 慨有志の輩とあそびみ
 てそせらるる難し過つる代
 匿ひて遂に幕府の疑
 ひを受け阪地を潜居し
 一々京師のありをり



一翁君ハ旧幕府の臣より
 てしめ越中守とし隠居し
 て一翁と呼び再び参政の格
 に進み戊辰の戦争に西城
 にあつて総督宮へ君臣同
 體の罪と軍門を謝し開
 城として官旗を迎へ奉順
 ありしが維新の後より
 東京府知事を拜命す
 幾程もなから四位議官
 と叙任せられたり



小弥太君ハ旧長州の
 藩士よりして頗る英
 雄なり戊辰の役より伏見の
 関戦より薩藩隊と俱に
 奥羽より屢々軍功あり平
 定の後陸軍中將となり佐賀
 熊本山口の乱と鎮の明治十
 年二月西南の事起りより
 總督の宮と俱に肥後路に起き
 之を平定するに從四位の二
 等議定官を兼任せられたり



重信君ハ旧佐賀の藩士ニ
 して博識多才あり閑叟
 侯ニ就て国事ニ尽力大
 政復古の大業をあり
 其後官途よりつて
 参議ニ任じ明治六年正
 四位大藏卿と兼任して
 同く十年西南ノ事起
 りより西京行在所ニ
 ありて兩大臣と俱ニ謀
 り平定ありしめたり



大隈重信

いふ
 夢の
 なつとまわりし路
 匂ひはるる梅のひと枝

山岡氏ハ旧幕府の臣ニ
 して、壯年より擊劔を好
 ん博識多才より兼て書
 を能く戊辰の戦争ニ勝氏
 ニ就いて事を謀り田安龜
 の之助君を以て徳川の養君
 と定め遂に静岡より
 其後官途ニ就て從五位
 宮内大丞戊辰命一幾
 程もよく皇太后宮亮と
 唱ひ替へしよりとぞ



山岡鐵太郎

夢を
 くの
 よー
 富士の山
 りとの姿
 か
 せり
 たり

利秋君は旧薩藩士にして文武智勇を兼備し和漢洋書を渉り戊辰の役は屢軍功あり平定の後大敬言視し任じ明治十年西南事起り陸軍少將兼任し別動第三旅團の兵隊率く熊本城の圍を解鬼ヶ嶽の壘を拔き遂に鹿兒島を連絡茂通じりり



川路利秋 嵐

雲らくまきし我を怨むりは至

鳥

宗光ハ紀州藩士にして戊辰の役ハ奥羽函館に出張し軍功あり維新の後神奈川縣令となり幾程もまぐ從四位元老院議官に任じ頗る博識の聞名あり明治十年西南事件に關係あり不審を被り拘引の上禁獄となりといふ



陸奥宗光

ちまゆく伐愕まぬこれと思ふ

なりり

清隆君ハ旧薩藩士にて
文武兩道ヲ涉リ戊辰
の役ニ奥羽函館ニ
出張シテ屢々戦功ヲ
鎮靜の後北海道を巡廻シ
屯田兵の事を建言セリ依テ
正四位参議兼開拓使長官
ニ任ジ明治十年西南の事起
リ勅使柳原卿と俱ニ鹿兒
島ヲいり肥後の熊本城
ヲ赴キ連絡を通シたり



黒田清隆
忍恥ヲたづる
煙りの末途ニ
外つ國までと
行ヨリヨリと

洪沢ハ橋家ニつゞく徳川
民部卿ニ隨行シ佛蘭西
ニつゞり維新の後帰朝シ
テ官途ニ進ミ職を辞シ
経済学ニ専ラ為リ富
國強兵の基ハを閑々んガ
為メ商法律を正シ遂ニ
國立銀行の創業を成
普ク皇國第一の社と
スルノのなり



洪澤栄一
揮子國境
一ハハ
引
強
ヨリヨリと

馨君ハ山口縣士族よりして博識多才より明治八年十二月十三日黒田清隆君を特命全權辦理大臣として議官井上馨君特命副全權辦理大臣となり詔命をりて朝鮮に航海し同九年一月朝鮮釜山浦に著船なり二月廿六日裁判調和親を約し三月四日帰朝ありける



大倉ハ西洋機械学を勉勵し専ら舶来の器械を買入諸官の御用を請ふ内國を發明せし器械各國に運輸せり捌賣せんとを方より洋物も何品も小ぜが東京尾張下練瓦石炭をて數十軒の建築より及物器械米業よりハ突の皇國の譽する豪商といふべし



隆吉君ハ静岡縣士族ヨリて
 溫和沈勇の人ヨリ山口縣
 令を拜命シ前原黨の暴
 挙をシつめ巨魁一誠が獄
 中ニ何つて罪を待テ一頃
 隆吉君ハ或日自ラ一陶
 の酒を推乃へく其辭を慰
 め一誠ニむらひ遺言ヲあ
 らんハ我身ニ引受け果
 すべシ一ニまろおきなく言
 ひ残されよと懇ニ傳ひ
 故一誠も落涙するす其の
 後一誠の兒を周旋して
 入塾させたり

関口隆吉

教りお

色かえ

見初る雪あり

足福花関



黄村ハ旧幕府の臣ヨリ
 始栄五郎と呼び年
 人の正ニ叙シ清水民部卿
 と俱ニ佛蘭西ニ到り帰
 朝の後徳川の参政と
 まり此人博識多才ヨリ
 洋航してヨリ洋学を
 きへ学び詩文も達せ
 一ダ維新の後静岡ヨリ
 たり官途ニ望み私学校
 教師となつて出京なさむ

向山黄村

谷の古巢

音の

音の



武揚君八田幕府の臣
 一 正義絶倫の英傑
 あり戊辰の戦争は武州
 品川沖より回陽丸に乗組
 く函館より入り官軍
 を悩ませるなり一
 回陽丸破船して遂に降
 伏する一長く獄舎に絆
 其後放免され官途
 進み特命全權公使となつ
 て欧米各國へ赴き多
 くの功績を上げた



榎原八田幕府の臣
 一 真景流の達人なり
 就中柔術ふと東
 京下谷廣徳寺門前
 道場を構ひ撃劔會を
 行業一木朝の昔
 を忌すれさう為の
 日本杖を發明し其
 教導次第を以て是
 を江湖に示す



千浪ハ通稱を弥三郎と
 呼び萩園と号し陸奥
 國白河の産うして名高き
 歌人あり國學に通じて
 書法能く既し橋千蔭の
 末裔ありといふ人ありき
 小あしこれハ藤原姓あり
 多く真淵宣長の原を
 慕ふ譽の著述あり時
 明治十年十一月十八日
 享年六十八を卒す



花蹊ハ西京の人あり志
 操雄々しくして博學
 多才なり丈夫は愧
 づらくとざる烈女な
 りしり画を能く維新
 の後東京よりりて
 女学校を創立し華族
 官員の幼児を教育し
 て且画学校をも取設け
 多くの塾生へ教を爲し
 画をもつて名を重しける



富姫ハ宇和島旧知事

伊達氏の女あり十七歳

て島津家の公子悦三郎

嫁して婚姻の約締む

摂州神戸まで着せり頃

鹿兒島ハ早戦地とあり

一姫ハ更ニ驚く景色を

一旦父母の家を出て夫

帰づく上ハ海底に入て藻屑

とありんも吾儕ハ厭ふまじ

と鹿兒島ハ渡海せりといふ

伊達富姫

喜ぶ

つた

身

今さら

君

お

あ



蘆澤鳴尾女

か

弟

ん

の

ま

の

境



鳴尾女ハ旧會津家の老
女なつとめ戊辰の戦ひ
ハ京師よりつゝ艱難を
が遂に女教師とらるる
昔は優る身分もれど
子ハなく只甥の直道兄
弟杖柱と頼み思ひ
既ニ武備は勝れ一家
し頗る烈女あり彼
の兄弟西南征討の官軍
中より敬度の戦ひ
武功をあり討死
をとりて音信絶
を自かす推察るや

高福ハ八郎右衛門あり
 皇國第一等の長者ヨ
 テ風雅を専らヨ
 書ヲ好ミ詩文ヨ達
 一雇僕ヲ惠ミ市中
 の貧家ヲたつね年ヨ
 兩三度の施行を
 又官省へ赤心を
 一國産ヲ尽カ
 多くの事成功あり



三井高福
 國民の
 己
 ひ
 我家の
 打鹿き
 煙りも多か

岩崎ハ土州阿氣邑の郷士
 一文武ヲ好ミ常ニ忠
 憤の心深く幕府各國ニ和
 親して開港ヲ許セ
 土州近海ニ測量
 憂國の志氣烈ク此人維新
 の後藩主ニ謀リ多くの墨
 艦ヲ買入三菱商會の社長
 となり山口鹿兒島の拳動
 軍艦ヲ以テ屢朝廷へ
 功を奏セハ頗る英傑ト



岩崎彌太郎
 愚私ヲたつち
 煙り純
 た
 ぬ
 ま
 ぬ
 國のた
 め
 む
 り
 あり

行誠和尚ハ東京本所
 回向院の僧侶トシ博
 識多才ナリ佛書トハ
 ふもまらまらリ國學詩
 文ト通ト國事ト力カシ
 て撃劔ト善ト勤王の
 志氣ふろく維新此
 後小石川傳通院へ轉
 任トて説教を熾メしつ
 ねハ風雅の心あつて和
 歌を好むといふ



是真ハ通稱を順藏と呼び
 旧時繪師多リ風雅の心ふ
 かく文人画とこの詩文
 和歌も通ト俳諧の席
 へ多く列ナリ常ハ友人
 を多クみ性質簡約ト
 て詞少ク弱冠のときよ
 リ頗る奇人の聞へり
 俗人と交ふこと成辞す
 とソ



安芳君ハ幕府ニ仕ヒ始メ
 麟太郎と呼ビ博識多才
 リ安政二年四月長崎小ヾ
 リ蘭人小就キ蒸気船の運
 轉ヲ學ヒ其後水師提督ト
 多ク安房守ニ任ト國事
 盡力ニ維新の後ハ静岡
 ニ住シレレ城參議ニ拜
 命サレテ再ヒ官途ニ入りテ
 幾程も多ク辭職シテ專シ
 風雅ニ遊ビケル



勝安房
 父ワツゲ
 池ノ邊
 此ノ地
 肉ノ毛ノ那

隆盛ハ通稱ト吉之助ト
 呼ビ南州ト号シ博ク和
 漢ノ書ニ通シ無類ノ英
 傑ナリ大政復古ノ功臣ニ
 シテ正三位陸軍大將ニ叙
 任シ賞典録ニ千石ヲ賜
 シ後辭職シテ鹿児島
 島ニ歸リ明治十年二月朝
 廷ニ尋問ノ事アリト肥後
 関戦ニ天運ツキテ九月廿四薩州
 城山自殺ス行年五十七歳ナリ



西郷隆盛
 雲々々々々
 夫のさか
 りこ
 治
 たまきく入日
 はまきく入日
 安房守の山

千城君ハ高知縣士族よりして幼名
 と守部といふ剛氣絶倫の英雄
 大儒安井先生と師として
 和漢の書を研究す戊辰の役は
 旧藩の監察とありて奥羽に戦
 功屢々あるに其後陸軍少将に任
 明治九年熊本鎮臺司令長官
 となる同く十年二月鹿児島
 兇徒熊本城を囲こしと
 千城君ハ慄悍なる大軍を物
 のかどとせしす六十餘日の籠
 城に遂に一度も不覺となく
 従容として首尾全とかりし
 とす



熊本の千城
 谷千城
 大棟の指月
 旗はあまをくく
 代の望

小勝ハ本名を勝女と呼び
 東京茅場町辺の藝妓より
 故りて種田政明の妻と
 肥後国熊本より明治九年
 十月神風連の暴徒等鎮臺
 邸に討入り種田少将を横死の
 場は手疵を負ひ熊本に治療
 せし折柄薩兵熊本城に迫
 る勝女ハ城中より官吏高
 木何某を懇慕せしとせし
 禁め麻衣を穿たりと紅裙を
 差出し哀しむ高木何
 某ハ遂に思ひ止り翌日花岡
 山の麓にて戦死せしと聞
 勝女懇に吊ひたりとす



小勝女
 身乃
 長しみ
 思ひ
 袖の白き

綱良ハ鹿兒島縣士族小して
前名格之助と呼び報國乃
志氣深く維新の際屢々
戦功あり依て鹿兒島縣令
を命ぜらる然るも西郷黨
小與して暴拳を援け金
穀彈藥を送りし事頭れ
遂に官位褫奪の上長崎臨
時裁判所へ護送され談地
おきて明治十年九月廿五日
刑せしむるなり



新八々旧薩藩士より
桐野篠原の右に出る英雄
より維新の後陸軍大佐
兼宮内大丞を拜命し
右大臣岩倉公に隨行し
て歐米各國を巡廻
す帰朝の後鹿兒島より
り明治十年西郷黨に
くし官軍を愾す事
屢々ありしが遂に利をう
しむ城山に至りて自殺す



尚雄々鹿兒島縣士族
 一々中原正平の嫡
 子より警察官吏と
 まつて少警部次拜命
 一明治十年一月疾く
 も西南の事件を察し
 帰縣一々兇徒の爲に
 捕ひられ獄舎に繋れ
 一と勅使柳原卿下向
 あり一後護送せられ
 て東京より送りあり



中原尚雄

神よ
 のを
 君を
 あ

我心道とら
 のぞむと思ひば

鐵然ハ真言宗の僧一
 博識多才より官乃
 許とらけ薩州鹿兒島
 いより縣下を布教のため
 徘徊せ一折柄其他真宗
 東派乃別院より教法弘通の
 為め縣下へ入込一僧侶
 と兇徒等捕り押へ十三令
 切害一鐵然ハ辨解せしむ
 ちん獄舎に繋かま一と勅使
 下向の節東京へ護送されり



大洲鐵然

東の
 道
 山
 墨染衣
 いくよ
 みるよ

不二齋君ハ旧尾州藩士
 博く和漢の書ヲ
 通し兼て蘭洋の学ヲ
 學びて詩文和歌も
 達し維新の先づ文
 部大輔となり内國一
 公立学校を發業なき
 人事を建言し遂に
 採用あり盛大なる
 り其後從四位に叙任せ
 られり



島津久光公の四男
 て膽勇秀才あり明治
 十年四月島津家兩侯
 の名代として舍弟忠欽
 ぬと俱に西京に着し
 島津家より徳大寺宮
 内卿へ宛たる書翰を差
 出し同月十六日参内
 の節數々議論なき士
 族より華族の扱とな
 りて退出せしむ



東海傳

昇君を長崎縣士族とて
 博学多才あり大坂府
 の知事を拜命しそより
 府下の人民を深く恵み
 民権を専らうし裁判を
 聞て罪の黑白を知り事
 つねふらぬ人なり公暇
 を得る時ハ洋書を研
 究し性質詞少くし
 て頗る英傑ありとて

渡辺昇
 浪波浮
 みどり
 蘆
 よる浪
 音
 まるの歌の存



多助君ハ山口縣士族と
 て実直絶倫の博識あり
 諸子百家の書ハいふも更
 野史小説も通し埼玉縣
 令となりて從五位に任
 明治十年二月西南を起
 縣下の士族征討從軍を願
 出より之を厚く注意して發
 足の節自ら戸田川まで
 見送り蓋成酌みかこ
 て訣別とて茶とぞ

白根多助
 大宮の表
 ちるるの表も
 月
 しろら
 あらゆる
 留非花聲



三州も豊後の國の人よ
 長藩も任一博く和漢
 乃書も通ト詩文章
 かいふも更なり野史小
 説もよくもて著す
 とこの書数百卷あり
 書画茂能く願了大
 家も九八衆人の辱々知る
 と二海より所謂能
 書の一等きりり
 いふ



川田も性理学を修め
 書数多著述して其
 德行世も真き大儒
 もり兼く洋学をさ
 へ学ば詩文和歌達し
 門人等も多く奉く
 公立学校の教師と為
 一内國へ漢学を熾
 せんと尽力せし実
 願了賢者ト
 仰きなり



大鳥氏八田幕府よつら
 へ強勇無類の英傑ま
 り戊辰の戦争まも
 榎本と俱り回陽丸
 乗込て函館へ脱
 官軍を抗へば屢防戦
 まし遂に利を失ひ
 降伏して禁錮され
 一が其後放免あり官
 途に進む工部局長を
 拜命まゝなり

小華三州田原乃人ふ
 して渡辺華山の嫡子
 あり生長の後椿山
 就て画を學び専ら亡
 父華山の画風なり頗
 る名誉ありし諸國
 遊歴の後八古郷田原
 帰り雪月花友と
 して風雅の心ありて
 詩文和歌少を達せ
 といふ

大鳥圭介
 名やそら
 空や
 えぐ
 とく
 又と
 このか
 かよひてよめる
 秋は
 秋は
 秋は
 秋は



渡辺小華
 山を
 あり
 あり
 あり



其水ハ通稱を新七と
 呼び狂言作者として
 久々劇場小関係あり
 無數名譽の人物あり
 開明の後和漢の書小老
 眼をさし西洋翻譯書
 も専ら研究して俳優
 之を示し劇場の旧弊を
 一先ふさんと社長守田
 勘弥と談合し新著を
 勉勵あさせしとそ



河竹其水

己の
 を
 の
 川
 川
 の
 の
 の

潮花ハ壮年より博く
 和漢の書に涉り軍談
 師の英傑あり兼て易
 学の深理をとり研究
 し野史小説も通
 し辨舌の妙を著し
 狂談を吐ず読書に
 ありあて講談し専ら
 古風し演舌ありし
 社中を教導せしと



伊藤潮花

増鏡人の
 法を
 世の
 あり
 今
 の

まか

家号と糸屋と称し其先
 信州飯田の産なり壯年より
 武州横濱に出て商業に専ら
 勉勵を以て實に皇國無類の英
 商なり其氣豪邁にして頗る人
 望高く又東京横濱の兩所
 に諸會社と設け經濟學
 を熾しや一人其積徳を
 稱して天下の系平と呼
 び其名を海外に轟か
 せり



奴ハ本名を勝女と呼び八丁
 堀保科仁兵衛の娘にして明治五
 年の春十三才にて酌女となり
 住吉町に營業す常は兩親
 の手元は在らざる事を數き
 其年暮は兩親共住吉町に
 引とり養育せしが實に孝
 心深くまゝ諸藝に専ら勉
 強し同く八年藝妓と成つて
 より況て勤し心を盡し普く江
 湖に其名譽を知らせしり



春湖ハ尾州の産よりて学
たけ俳個日名高き人多り幼
少より行脚して日本をめぐり
多く関東に遊学して実直る
り諸子百家の書を通し隠
逸して人は媚る心なく頗る
奇人なりといふ

海苔白魚の味も
都の海の味
強りなり
吾のこころ山

五代の薩州の人よりて豪
高きより憂國の志氣深く
専ら國事を力して維新の後
桐野陸軍少将永山大主典と同
伴して樺太辺境巡廻し北海
道産物運輸に勉勵し開拓の
事務に心を勞し官費を除かんと
して既に北海の難濤を凌ぎ
薫氣の運輸を熾んよす
も実より友厚が憤發より
出る所あり

小竹庵春湖



花の
下巻

五代友厚



民
我家ののみきと
此みり
以て
けり
て
は

新吉原角海老樓の小紫
 八諸藝み達し標高く弱
 をあられみ猛きまゆを
 まね全威なれち或る遠
 國の客が小紫の寫真と
 所有して吉原町に來り
 長龜屋何某といふ引手
 茶屋より案内を受け遊
 興の餘り多くの金と費
 やすも深く止む異意を
 加へ國許へ歸りてといふ



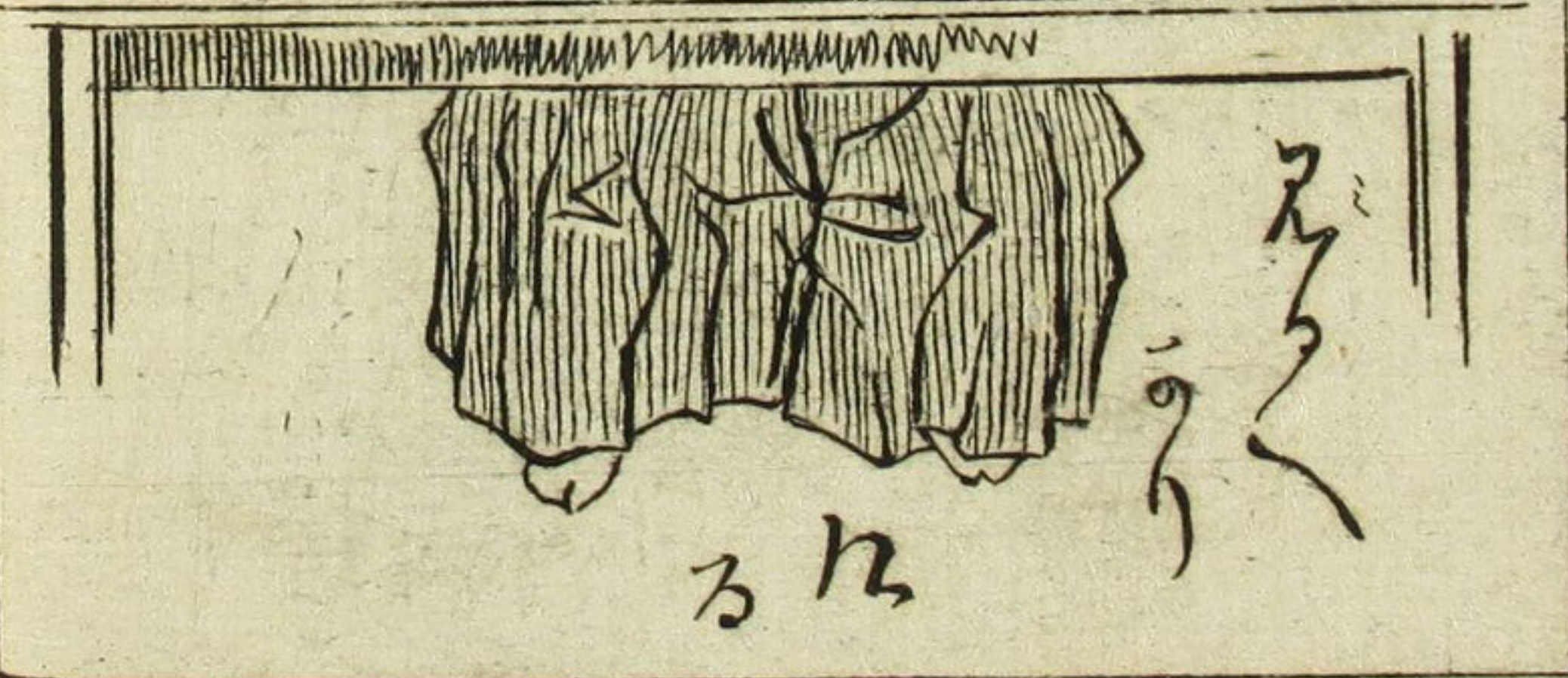
厚姫と稱し島津家の息女
 あり徳川十三代の將軍家
 定公は嫁しを頗る列女ふ
 り姫もとまり貞節深く
 慶應四年の春官軍下向
 の時、姫自かき書と認め
 薩藩の参謀へむけ使者
 戎以て總督の宮へ徳川
 内府の罪伐謝しを徳川
 家名の永續をせり
 とす



麟祥君ハ作州津山の藩士として博く和漢の書に通じ兼く洋学を学びて既小諸子百家の書ハハハもさうなり野史小説は渉るを以て著す所の書類數百卷有文久慶應の頃國事ハ尽力一維新の後官途ハ進み司法省大書記官ハ叙任しけり



箕作麟祥
横濱
道
横濱
石



るん

桐野ハ幼名を中村半治良と呼び鹿兒島城の上吉野村ハ成長し薩藩に仕ひ戊辰の役ハ總督の宮ハ随ひ江戸ハ到着し又會津ハ向へ敵を惱す事屢々なり奥羽平定の後陸軍少將ハ任兼熊本鎮臺司令長官となりて熊本に至り幾程も多し辭職して鹿兒島ハ歸り西郷と謀り明治十年二月肥後ハ暴挙し戦ハ利あり終ハ薩州城山ハ自殺せり



桐野利秋
あつあつ
新風ヤ
ふくらん

平山ハ白幕府ハ仕ハ博識
多才ヨシテ始メ鎌次郎ト
呼ビ圖書ノ頭ニ任レ參
政ノ格ニ登庸シテ國事
ニ尽力シ既ニ將軍慶
喜公大政ト返上成ス
仍テ平山ハ退職シ寄合
ノ席ニ至リ維新ノ後静岡
ニヨリ近國ト遊歴シ遂ニ
東京赤坂氷川社ノ神職ト
あり説教トシメヨリト



平山省齋
世の中ノまじりも
甘きも

あはれをて
味を記を
うはまきとせ

介石ハ肥後國熊本の僧
侶ニシテ奇才アリ博
く和漢ノ書ニ通シ
諸國ト遊歴為シテ
佛書ニ講義ヲ専ラ
ス兼テ究理ヲ
説キ衆人ニ示ス
其英名ヲ江湖
夷カク普ク此僧
議論ニテ右ト出
人ニシテ



佐田介石
世の中ハ

山傍
のまつる也
あてらるる

あてらるる

山川の旧會藩よりして
大藏と稱す文武兩道
長し元來活潑機敏も
生質あり戊辰の戦争も
會津藩官軍に抗敵す
の際に軍功あり遂に降
伏とあつて禁錮せられ其
後官途に就て陸軍中佐
を拜命し佐賀に更起り
浩ハ直進して佐賀城
に討入るゝ其時重傷
を受け非役士官となり
西南事件に戦地へ
出張し熊本城に先登せ
られ連絡を通じたり



松平ハもと幕府の臣

たり勇猛を以て頗る
義氣あり戊辰の戦
争に復本と俱に回
陽丸に乗組み函館に
脱し屢官軍に抗撃し
遂に降伏を禁錮せら
れ其後放免あり官
途に進み幾程りなく
辞職して風月を俱と
し樂しむなり

松平太郎



函館山の

さく不若の影

宗則君ハリと薩藩士トシ
博識多才ヨリ文武
智勇俱ニ兼備一且洋
学ヲ渉リ戊辰ノ役ニ
伏水ノ関戦トシ真羽を
平定ス一維新ノ功
臣トあつク参議とな
リ正四位外務卿を兼
任一其後臺灣ノ一挙
トシ支那朝鮮見克
件ヲ肺肝をくだき
兩大臣ト俱ニ容易ニ
伐トシ皇國ノ美事
を万国ヘウビヤク
ナリ



寺島宗則
とり馴一
ニヤル
乃

つ
る
ぎ
る
乃
ひらき乃るるのれ
よつ乃
ふとあそ

吉直君ハリと柳川藩士トシ
工膽勇ヲ事業ト越たり
戊辰ノ役ノ戦功トヨツテ
陸軍中佐兼少警視を
拜命一明治十年二月
西南ノ事起リ否哉熊本
ト出張一テ多くノ賊星
を抜き鹿兒島ト趣キ
凱旋ノ終リ迄数度此
激戦トカヨビ勇名を轟
カシタリ



綿貫吉直
新々
乃乃乃

研魂
日本
あけ
も
乃
乃
乃

阿部景器、熊本縣士族
 として文才有り明治九年
 十月神風連或ハ敬神黨ト唱
 ひ暴徒ト加リ本意を
 達せず我家ト立歸り仔
 細を妻子語り自殺ト望む
 時妻伊幾女ハ鳥居何某
 の妹まりし未練かましき
 辞杯も毫も出さず夫
 景器ト最期を進め其才
 も遂に及小伏一たり



三州子ハ井上文雄の門
 人として幼少より和歌を
 好み風雅の心あつた故あ
 りて藝妓とより一見識有女ある
 を以て高位の令招かれ又三州子
 も客と選み猥り不ぞや華族
 官途の人不出てハ和歌をも
 慰め其の狂あるを稱しけ
 り其後藝妓と廢業しそ
 歌学を専らふそハ実小稀
 もり列婦なりしとを



治兵衛八回来東京下谷池の端
 住一と業種と業と一今
 既小九世を嗣うれ其性書画
 を好くまゝ道話を以て朋
 友小語り専ら全家の和順
 するとと樂一或ハ常小満
 りのハ必ず欠る故小富貴と
 終小禍害と生一貪賤ハ反て
 閑達の理ゆると説き文久二年
 小寶丹と稱する一種の奇薬
 と發明一方今其名を全州小
 震ふ普く衆人の求小應とを招
 牌と認め書体一派を為と以
 て人呼で寶丹流と稱一多



世履君ハ長門の人一
 博識多才より維新以業
 官途を就る屢國事咫尺
 カ一從四位二等判事登
 庸一専ら法律を正し
 裁判肺肝をくだり
 且仁智を開り一
 一為る一經濟學を以て
 江湖を示す其功奉て
 らるへがこく實皇
 國の名誉と知るべし



英名百首

重臣君ハ舊長藩士にして
 温良沈勇より幼少より文武
 を好み頗る英傑きま戊辰の役
 二ハ奥羽に出張して屢軍功あ
 り平定の後陸軍少将とす
 り明治十年二月西南の夏
 起る否や野津少将と俱日
 征討先鋒とまつて肥後の戦
 地より第二旅團の兵を
 率て熊本城の圍と
 し連絡を通り



三好重臣

喜露河のるが
 せきふまふへる
 月ちさだ
 秋生比
 忍えぬ
 一のに

友幸君ハ山縣士族よりて國事
 に盡力し維新の後内務少輔
 任し明治九年より十年二月
 頃大分縣下近辺を巡回申鹿兒
 島に暴拳沸騰を疾くも
 搜り聞て説諭を加へんが
 為め薩州に赴き一が
 兇徒ハ國境の要害を固
 め上陸を拒む故直に長
 崎へ傳報し忽ち發艦し新
 然征討の派出に注意せしと



林友幸
 秋蔭の
 さのりや
 あり
 らん
 ふあふ
 玉川

池邊八熊本縣士族にして
 武術を好み兵学に通じ
 且軍畧深く西南に事
 起りしより鹿兒島黨に
 荷擔せし日向路に操出
 官軍に抗撃し猶大隅に
 退き桐野の兵と喋り合
 ひ屢々戦ひて明治
 十年十月十六日同國
 郡山郷におひて縛
 り就きたり



いそや
 さこの
 せん
 山標あれ
 あつさき春來五郎
 池邊吉十郎

尚信君ハ旧薩藩士にして
 博く和漢の書に通じ
 兼て蘭学をさへ学ひて
 詩文章小達し維新乃
 際ニ京師にありて國事
 盡力し官途に就て其後
 歐洲を巡廻し洋書
 小長たり特命全
 權公使となり従四位
 叙任して外國にたり



篠島尚信
 梅島さきまみかぢ
 篠島
 梢なりけり

孝平君ハ弱冠の時中
 國遊小遊びて和漢の書
 一週一兼て蘭洋学を
 字び詩文章ふ達せし
 性質簡約ふしと詞少く
 頗る長者の風あり維新
 の後神戸の縣令となり
 て人民を深く惠民幾
 程もかく元老院議官に
 一う從四位文部少輔に
 轉任るなり



神田孝平

日の不純道

ひとゆめを

民

よく

ふ

まに

ふめとや

おえととせけん

小野ハ旧常州笠間藩士
 一よく測量学に達し
 幕府に仕ひ江城の建築
 一専ら尽力し旗下列
 となり維新の後洋算を
 熾んし指南所を開
 き一ツの校を設け和洋
 共ニ教導をなす多く
 塾生を集め頗る門前
 一市をなす

一めくり



小野友五郎

か
る世子
生れはひし

壯

の
支

の
幸

天
地
の
神

従道君ハ西郷隆盛の弟ニ
 して膽勇秀才あり常ニ報
 国の義氣有るがゆゑ戊辰の
 役も人ニ後る事を耻とし
 既に軍功を以て陸軍中将と
 なる明治十年ニ西南支起り
 陸軍卿代理となり或日友
 人ニ語り嗚呼兄をして敵
 羅巴を見やめハ此拳ハ
 至るまで勇氣ヲ替らさき共
 自ら嘆息の涙をうらめしとぞ



西郷従道
 日の本地
 光り綫
 外玉の
 照す
 秋の夜は

篠原ハ旧薩藩士にして幼名を
 冬三郎と呼び和漢の書に通
 ト武勇絶倫の英傑なり戊
 辰の役ニ軍功ありて陸軍少將
 任ト其後辞して鹿兒島へ
 歸り西郷と事を謀り明治
 十年二月先鋒の大將となり一
 時肥後熊本より植木田
 原ニ威をいめさき官軍の
 為ニ墨坂破られ終ニ彈丸ニ
 たりて吉次越の露と消へたり



篠原國幹
 八代
 浪
 干の
 月残つる事の事

由利と旧越前藩士より博識多才あり諸子百家の書に渉り戊辰の役より藩主春嶽侯と謀り朝廷へ忠を尽し維新の後貨幣通用の事を建言し東京府知事を拜命して其後元老院議官となり從四位に任じ商業を専らし遂に辭職して經濟學を勉勵ありけりと云



由利公正

一考りよ
を
ある
あつた
名残もあつた
その
あつた
あつた
あつた

諱を慶永朝臣と稱す越前福井の藩主より安政五年の秋嫌疑の事ありと隠居となり一が萬延年間總裁職に撰擧され正義を主張せし有志等大に欽慕せしが幾程もまじく職を辭し京師より一が戊辰の役より本國越前福井より一が忠憤せしとぞ



松平春嶽

かほり
ゆく
のよ
魁ハ
乃心

林ハ上總の領地よりりて
 徳川征討の兵関東へ下
 向と聞や否や無類の英傑
 多れハ船まで相州小田原へ渡
 り大久保の兵と募り箱根
 の嶺とて籠り脱兵を率入
 れ官軍に抗撃せしが大軍の
 為に追討され九州熱海より
 航海して本領へ退き
 降伏の書を總督宮に呈謝
 罪恭順してたり



種樹君ハ日向国高鍋の旧
 知事秋月土佐守の次男
 として幼少より博く和漢
 の書を学び且詩文を通
 旧幕府の頃参政とてつ國
 事は尽力し維新の後旧
 領地よりりし其後官
 途に進み從四位の議官
 叙任せられたり



諱と容保朝臣と稱す尾州家乃三男一と會津若松藩主たり文久年間京都の守護職まはりて長藩と葛藤を生じたり其後征長の事止り徳川内府大政返上せり折柄ハ内府一隨行し大坂より再び上洛の先鋒をふる官軍に抗撃し利を失ひ奥州會津に退き籠城して官軍と數度戦争及び遂に降伏し謝罪実効を相立其後斗南藩知事とありて隠居となり



諱と慶喜公と稱す水戸烈公の第七子とし一橋家を相續し京師に於て徳川十五代の將軍となる慶應二年政權を返上し奉り阪城に退き再び参内ふさんとし伏見に開戦し江城に歸り退城あつく水戸表を恭順謹慎し謝罪の実效を相立て駿州静岡より



久光公ハ島津忠義卿ノ父君
 として性質英明多ク故爲す
 所皆意表に出で然るは文久二年
 の秋勅使大原卿と警衛一と関
 東より事決し帰洛の節久
 光公ハ其頃島津三郎と呼び國
 事ヲ尽力せし折柄は東
 海道生麥村へ入りて英人
 の不禮ニヤむを得ず三名を切
 殺し其後諸卿は王政復古と辨
 解せし維新の功臣とあつて從
 三位内閣顧問と拜命し辭
 職しより旧領鹿兒島より
 入り從二位左大臣と叙任し
 たり

島津久光公



つくしあ
 重井
 の
 う
 ち
 むれハ
 ありふふき
 ありふふき
 ありふふき

原版人

力石安之助

明治十四年八月廿五日

翻刻御届

同 年九月

刻成発兌

定價金十八錢

翻刻人

京都府平民

大谷玄之助

下京区第五組辨慶石町
 六十四番地

同

同

近藤太十郎

下京区第十九組西橋結町
 七百三十六番地

、
發賣人

京都富小路三條下ル町

遠藤平左衛門

同 二條通柳馬場角

石田忠兵衛

同 寺町通三條上ル町

辻水九兵衛

同 寺町通松原上ル町

今井七郎兵衛

同

同

同



